

珠海出張時の定宿ホテル最上階(29階)レストランからの展望である。

画面中央のあずき色の屋根がイミグレーションオフィス、これを挟んで手前が中国、向こう側がマカオとなる。

マカオは香港と同様、特別行政区であり、厳密に言えば国境ではない。

ただし、このイミグレーションで、双方への往来はしっかりコントロールされている。

画面上部右側がマカオタワー、その左側の頂部が尖った建物がグランド・リスボアで、大カジノを併設する、マカオでも最も豪華絢爛たるホテルの一つでもある。

画面からも、珠海—マカオは目と鼻の先であることがお分かりいただけるであろう。

我々(外国人)にとって、ここへの出国・入国はいたって簡単。

昼飯は、マカオにポルトガル料理でも食いに行こうか、ということも可能。

その料理の名のとおり、マカオはつい10年ほど前までは、ポルトガルの植民地であった。

そのポルトガルから中国に返還されたのが1999年12月。

当時、私が建設所長としてたずさわった珠海での発電所建設工事が正に最盛期の時期でもあった。

その苦楽の出来事が、2000年問題を控えながら21世紀を迎えようとする慌しさと重ねあって思い出される。

以来、目まぐるしい変化と発展は返還前も知る人間としては驚きである。

このイミグレーションオフィスにしても、2階建ての貧弱な木造作りであった。

ところが、今はこの画面のとおりである。その前の広場の下には地下2階からなる大ショッピング街が広がる。

ここにマカオから、あるいは香港からの訪問客も含めた人々で昼夜を問わずの賑わいとなる。

香港—珠海/マカオ間の架橋工事も着工され、「香港から車で15分」も現実となってきた。新幹線も乗り入れることになるであろう。

カメラを構えながら、この先、この辺りがどう変わっていくかに思いを馳せるひと時でもあった。

